**吹田　孤蓬 （すいた・こほう）**

**１、プロフィール**

青森俳句会の代表として俳誌「暖鳥」を発行、風土に根ざした俳句をめざす。青森県俳句懇話会の設立に尽力、県俳壇の隆盛に貢献した。暖かみのある句風が人々を魅了する。

＜生没＞

1907（明治40）年６月22日 ～ 1989（平成元）年５月31日

＜代表作＞

句集『壺中壺』『壺中壺以後』『彼岸の河童』

＜青森との関わり＞

青森市に生まれる。大学卒業後、青森市立第一高等学校等に勤務し、郷里の子弟の教育に携わった。

**２、作家解説**

本名清三郎。大正14年に青森商業学校を卒業後一時黒石尋常高等小学校に勤務､昭和５年に旧制弘前高校文科乙類に入学､卒業後京都大学法学部に入学、在学中に飯田蛇笏の長男総一郎に勧められ作句を始める。在学中の昭和12年に吹田登美子と結婚､夫婦で臼田亜浪主宰「石楠」に投句した。大学卒業後青森市に帰り､妻の実家の商店に勤務するかたわら作句活動を続け､昭和15年３月に市内の各俳句結社統合の機運があり「青森俳句会」が結成された際､推されて機関誌「海流」の発行責任者となった｡

戦後「青森俳句会」の復興に努力し､昭和21年に機関誌「暖鳥」を創刊した。そしてその巻頭言には「永い抑圧の間にも脈々として､その生命を続けて来たのであるが､今甦生の曙光を浴びて青森県俳壇に躍りでたのである」と記し､今まで抑圧されてきたものを一気に爆発させることになった。以後県内の有力俳人を同人として迎え、北方風土に根ざした俳誌作りに勤め、平成元年逝去するまで通算499号を発行した。その間、同誌からは県俳壇はもちろん､中央俳壇においても活躍する者が多数輩出した。

なお､「青森俳句会」は昭和55年度に第６回青森県芸術文化報奨を受賞している。また、若き日の寺山修司が投句していることも特記してよい。

孤蓬の戦後はまさに「暖鳥」とともにあったといってもよいが、昭和22年からは青森市立第一中学校、23年からは青森市第一高等学校に勤務、昭和43年に退職するまで教職にあり、独特の風貌とユニークな教育で人気を博した。

昭和34年には、青森県俳句懇話会の設立に尽力、47年にはそれまでの作句活動の集大成ともいうべき句集『壺中壺』を発行した。そして永年の俳句活動に対して、48年には第15回青森県文化賞、51年青森県褒賞、63年には地域文化功労者賞が与えられている。昭和61年第二句集『壺中壺以後』､逝去後の平成２年､句集『彼岸の河童』が刊行されている。また青森市内に句碑１基が建立された。

**３、資料紹介**

〇『壺中壺』

図書

1972（昭和47）年10月１日

180mm×130mm

第１句集。暖鳥叢書第一集として青森俳句会より発行。「暖鳥」に掲載した句より取捨選択し、戦後の俳句523句及び学生時代の２句の計525句を収めている。天衣無縫な孤蓬の人柄を偲ばせる句が多く収められ、人間的暖かみを感じさせる句集である。